

イナカ(田舎)のことばとウラ(浦)のことば

— 下関市の内日と安岡のばあい —

岡 野 信 子

はじめに

- 一 両地間の差異の小さな語彙・表現法・語法
- 二 両地間に異・同の相半ばする分野
- 三 両地間の差異の著しい語彙分野
- 四 両地における事象の保有と受容
おわりに

はじめに

同一の小方言域内にあつても、生活状況が異なれば、その生活語にも異なる面のあることは当然予想され、これまでの調査でも、断片的にはその状況を得ている。今回は方言状況比較の目的をもつて、内日(ウツイ)と安岡(ヤスオカ)とで調査をおこなつた。

内日は下関市北辺の山間の地で、農業・林業を営み、牧場を経営している家もある。下関駅からはバスで約五十分の地で、一日数回の便がある。一方、安岡地区は響灘沿岸の漁業、商業、農業の地であり、漁業者はかつては宍岐・対馬にも出漁している。また海運

イナカ(田舎)のことばとウラ(浦)のことば — 下関市の内日と安岡のばあい —

業の栄えた地でもあり、国鉄の山陽線・山陰線の開通以前は、大阪・尾道方面との交易がさかんであつたという。農家集落と漁家集落とは道路によつて分かれており、漁業者はみずから、「ココノリ」ヨシワ ハタケ ヒトウネデモ モッタ モナー オラン」と言う。国鉄山陰線の安岡駅は下関駅からわずか十六分の距離で、バスも頻繁に通っている。

両地はともに豊岡方言(豊浦郡と下関の方言)域内の地である。農家ことばと漁家ことばの比較に両地を選んだのは、これまで私自身がほぼ同程度に両地で自然傍受法調査をおこなつていたためである。今回はそれぞれ約三時間、質問調査をおこなつた。お話しくださったのはつぎの方々である。記して感謝申しあげる。

内日 一九八五年九月二十八日調査

秋本 伴成 (T5)	大田 誠 (T5)	岡村ハルエ (M45)
河村 智 (T2)	下村ツヨノ (T4)	利田 忠義 (T11)
豊田 政子 (M34)	中野 正香 (T6)	福田 定久 (S7)
安岡 一九八五年九月三十日調査		
楠尾 政道 (T13)	尾畑 正和 (T7)	隅 清子 (T7)

一 両地間の差異の小さな語彙・表現法・語法

身体語彙では、予想どおり方言差はきわめて小さかった。副詞語彙も、人々の口にしげんに上る範囲ではほとんど同じであり、表現法・語法面においても、方言差は小であった。

1 身体語彙 関連語彙をもあわせ記す。

(1) 両地の語詞が同一であるもの

頭部・顔面

アタマ(頭)、オツム(頭—育児語)、オドリ(ひよめき)、カミゲ(髪)、カオ(顔)・ツラ(顔—卑語)、デビ・デビチン・オデコ(額)、メ(目)、メガシラ(目頭)、メジリ(目尻)、メンタマ(眼球)、クロメ(瞳)、シロメ(白眼)、ヒガラメ(斜視)、マブタ(瞼)、マツゲ(睫)、マヒゲ(眉)、ミミ(耳)、ミミタブ(耳朶)、ミミノス(耳穴)、ハナ(鼻)、ハナノス(鼻孔)、ホーベタ(頬)、ホーベンチャク(横つつら—卑語)、コメカミ(顛顚)、ヒゲ(ひげ)、クチ(口)、クチビル(唇)、ツバ・ペロ(舌)、ツズ(唾)、アギ(顎)、ノド(咽喉)、ノドブエ(喉仏)

胴体

カタ(肩)、ケンビキ(肩癖—肩甲骨の下の大きな筋。肩こりの時、これを引っぱってもらう)、ムネ(胸)、ハラ(腹)、ワキバラ(横腹)、コチヨコチヨ(腋下—本来は育児語であろうが、一般に用いられる)、コシ(腰)、イド・ケツカブ(尻)

手足

ウデ(腕)、ソラウデ(肘から手首まで)、ヒシ(肘)、テクビ(手首)、テノハラ(掌)、テノコー(手の甲)、オヤユビ(親指)、ヒトサシユビ(人差し指)、タカタカユビ(中指)、クスリユビ(薬指)・ベンサシユビ(薬指—今は使わない語)、コユビ(小指)、アシ(足)、モモタ(腿)、ヒカガミ(膝の後、理解語であって使用語ではない)、ムコーズネ(脛の前面)、キビス(踵)、エーヒダスル・ヒザ(ダ)マズク(正座する)、タテヒザ(片膝を立てた座りかた)、ナガレヒザ(横座り)

体全体

ゴタイ(体)、タツバエガエー(恰幅がよい)、サブサブ(鳥肌)、スクバル(硬直する。安岡の漁家では死魚の硬直にも言う。)アガダチ(嬰兒の育ちぐあい。内日では、農作物・家畜についても言う。「アガダチガワリー」と、悪いばあいに多く使用される。)

(2) 両地の語詞が異なるもの 以下、内日を(内)、安岡を(安)と略記する。

つむじ ギリ(内) ギリギリ(安)

顔 さきに「ツラ」を顔の卑語としてあげたが、安岡では「きりょうがよい」の意味で「ツラガエー」とも言い、普通語としても用いられている。

眉毛 内日にはマイゲが先出のマヒゲと共存。

歯茎 ハドテ(内) ハブキ(安)

ほんのくぼ ドンノクボ(内) ドーノクビ・ボンノクビ(安)

膝 ヒラポーハン・ヒラポーズ(内) ヒザポーサン(安)

ふくらはぎ ヒルマスボ(内) ランキョー(安)

くるぶし トリコノフシ(内) 名を知らない(安)

足の裏 アシノウラ(内) アシノハラ(安)

あぐらをかく ヒザークム・アグラークム(内) アビタクム(安)

『日本語地図』(以下、L A Jとする) 上には、「ヒザークム」は九州東北部と四国全域に、また中国地方にもかなり広く分布している。一方、アブタ類は「アブタカク」が京都府・兵庫県の北部から鳥取県にかけて分布し、隠岐全島も「アブタカク」である。また「アブタクム」が鳥取県にいくらかあり、響灘に面した山口県の豊浦町と、玄海灘に面した福岡県玄海町の一地にある。安岡の「アビタクム」はこの分布域の中にある。

しもやけ カンヤケ・ユキヤケ(内) カンバレ(安)

L A Jでは「カンヤケ」は山口県下の分布事象であり、「ユキヤケ」は本州の日本海岸のほぼ全域にわたって分布する事象である。一方、「カンバレ」は広島・山口両県の瀬戸内海がわに分布している。

体格がよい 先の「タツパイガエー」のほかに、安岡の漁師は「ギタイガエー」(五体がよい)、あるいは「ガカエガエー」とも言う。「ガカイ」は『邦訳日葡辞書』に見えている語である。『日本国語大辞典』には、建物や体格の大きなことを言う語として、全国に点々とあることが示されているが、山口県下の例はない。

2 副詞語彙

内日には、程度や数量の大を言う言い草に「チューニ、ゴッポー

イナカ(田舎)のことはとウラ(浦)のことは――下関市の内日と安岡のばあい――

ドダイモナー」があり、安岡では「チューニ、ゴッポー、トテキモナー」である。これは両地の程度副詞語彙が同似であることを示すものと言えようか。今回、両地で聞いた程度副詞と時間副詞はつきりであった。

(1) 程度、数量の大であることを言う副詞

チューニ、ゴッポー、オーゴト、オモエデ、コンゲン、コンゲン
モナー、ヨーケ・ドヒョーシ・ドヒョーシモナー

安岡ではこのほかにヤレ(ヤレ)「たくさん」を聞いている。

(2) 中程度を言う副詞

ダエブ、ダエショ、ゴゾケ(ゴドケ) (心持ち多く)

(3) 程度、数量の少を言う副詞

チート、チョット、チビット

(4) 「おおよそ」と言う副詞

タエテ・オーネ

(5) 時間性の副詞

ハヨーオンソー(早く)、イットキ(しばらく)、イツン(いつも)
いつも)、ズーゾー(いつも一日の一九七〇年のカードにはズーゾーとあるが、今回はジョージョーと発音された。「常住」で

ある)、ステニ(今にも)、ヒータージョー(一日中)、ヨガナ
ヨッペテ(夜通し)、ハナカラ(最初から)

ここに記したのは副詞語彙のごく一部である。副詞はつきつぎに造語されてその語彙も大であるが、両地の副詞語彙の差異は小さいようである。

3 表現法・語法

(1) あいさつことば

以前は他家を「オヨロシハンセー。」(お許しなさいませ)と訪い、「ヨー オイデハンシタ。アンター マメナカッタ カナ。」(よくいらっしやいました。あなた、元気でしたか。)と迎えた。また遠方に帰る人を「ゴネン オイレハンセー」(お大事になさいませ)と送った。「オヨロシハンセー」は、「ゴメンナハンセー」とも言うが、「ハンセー」は今は「クダサイ」に変わった。

これは内日の八十四歳女の語ったことである。安岡の漁家の人も、ことばの丁寧な老女が、「ゴメンナハンセー」と訪い、「オイデナハンセー」と迎え、「ネンオ オイレハンセー」と送っていたのを覚えている。

両地のこれらのあいさつことばは、発想もその「なさいませ」敬語も同じである。ただしその「なさいませ」敬語使用の頻度が内日では高く、安岡では低い。安岡の漁家では「ナハンセー」「ナンセー」を口にする人は少なかったが、見送りことばの「ネンオ イレナイエ。」や、病氣見舞の「ネンオ イレンニチャー イケンゾナ。」は今日も多用される。また大正の末ごろまでは、買物に来た店先で、子供も「オイロシ」と呼ばわったことを、六十七、八歳以上の人々は記憶している。

今日、両地では、親しい間がらならば「オツテ カナ」(ご在宅?)の訪問辞をよく言うが、安岡の漁師は「オル カエノ」と、「テ」敬語ぬきで言うことも多い。

(2) 呼びかけとあいさつ

内日でも安岡でも、男性は同輩や若年の者、また妻子に「コリー」と呼びかけ、女性に「ヨイヨイ」と呼びかける。もつとも、「今はコリーは言わない」と言う人が多かったが、六十歳の漁師は「今でも言うことがある」と答えた。あいさつには両地で、「ハーソレカナ。」「オーソレカエ。」と言ひ、「ソレイノ。」とわずく。

(3) 動詞「ヤル」の用法

○イッポン タバコ ヤレーヤ。一本、煙草をくれよ。
○カシテ ヤレーヤ。借してくれよ。

これらは安岡の漁家の男性のことばである。この種の「ヤレ」は「クレ」と共存している。内日には「ヤレ」にこの用法はない。山口県下長門域では、私は萩市の見島や相島、下関市の蓋井島でこの用法を聞いている。周防域では柳井市で一九八五年五月にこの種の「ヤル」を年輩の男性たちから聞いた。藤原与一著「方言敬語法の研究 続篇」には、「ヤル」のこの用法が九州一円と島根県の石見地方にあって、福岡県下にことに栄えている状況が記されている。このような状況から安岡の「ヤル」は古い用法の遺存と考える。

(4) 「ゴト」の遺存

○オナゴノホーガ ドーデモ ナガイキョースルゴトアル。
女性のほうがどうも長命なようだ。

○ホククリクノゴタ ナイ。北陸のようではない。

○トートー ワカランゴト ナリマシタ。とうとうわからないうようになりました。

○イマノゴト ……。今のように……。

内日の話者たちは、「ゴト」をこのように用いており、安岡の話者たちのばあいも同様であった。九州ほどではないが、響灘域も、農家漁家を問わず、年配の人々は「ゴト」(如)を言う。

(5) 能力可能表現

両地ともに可能助動詞「エル」を用い、「イキエル」(行くことができる)、「ヨミエン」(読むことができる)のように言う。

ちなみに、能力可能表現に助動詞「エル」を用いるのは、私のこれまでの調査では、下関市域と豊浦郡である。厚狭郡の沿岸部でも言う所がある。萩市の見島では、「エル」は「ヨル」となって、「イツシヨーチュー モナ ノミヨラン」(一升などという大量の酒はとても飲むことができない)のように言う。山口県下では「ヨ

ーヨマン」(読むことができない)が一般で、異色を見せる「エル」「ヨル」は、九州西辺の「ユル」(ユツ)に続いている。

内日・安岡にはまた北九州の「キル」もわずかながら入っていて、「孫たちはイキキラン」(行くことができない)などと妙なことを言う。「と両地の話者たちは語った。

(6) 動詞の活用型の推移

両地ともに年配の人々は「カル」(借る)、「タル」(足る)と五段活用を保有しており、「飽く」は「アケル」と下一段活用である。ただし青少年層では両地ともに「カリル」「タリル」「アキル」とすべて上一段活用となる。この上一段化は、語ごとに、また活用形ごとに、いくらか遅速があるようであるが精査し得ていない。遅速は、両地の間にもありそうである。梅光女学院大学方言研

イナカ(田舎)のこととウラ(浦)のことは——下関市の内日と安岡のばあい——

研究会の調査では、「借る」は内日では十代、安岡では三十代と十代が「カリル」であった。

※梅光女学院大学方言研究会では、一九八四年に、下関市の七地と北九州市の八地でL A J全項目の調査をおこなった。対象者は七十代・五十代・三十代・十代の男女である。

一方、「見ん」「出ん」を九州と同様に「ミラン」「デラン」とラ行五段式に言うのは、両地の話者たちの意識では孫たちである。私自身は漁家集落ではときに中年の人たちからも聞いている。

以上のように、表現法・語法面の両地間の差異はきわめて小さい。

二 両地間に異・同の相半ばする分野

両地間に異同の相半ばする分野として「言いならわし」をとりあげる。語として扱うべきものも、その発想や比喩に特色のあるものはここにあげた。

1 両地で言うもの

ナベカリイ 村八分。現在ではできなくなったが以前はやったと両地で言う。内日では昭和初期まで鉄鍋でご飯を炊いたので、この語が「鍋を背負って一所帯を畳んで一村を出ねばならない」という意であることを理解している。早くからニュームの釜で炊いていた安岡の人々には語源はわからなくなっている。

ミチノコヤシ 道の肥料。無益の出費。

(内) ソネーナ トイー トコロデ シゴトシテモ ミチノコヤシニシカ ナラン デヨ。そんな遠い所で畑仕事をして、往

復の時間ばかりかかつて仕事にならないよ。

(安) ナンボ オキー デタケテ ナニー ナラー。ミンナ ミチノコヤシジャー。人を雇ったのでは、いくら漁しても何にならうか。出費がかさむばかりだ。

タニョー イル 種を煎る。材料や資金が底をつく。

ダグー ナゲタ さじを投げた。

(安) メー オーテ ダグー ナゲテヨル ホジャ。汐に追われたり瀬に網をとられたり、ひどい目にあつてやる気をなくしているのだ。

ゴタエガ ナバニ ナッタ ひどく疲れて体が萎えてしまった。

オニデモ シッタ オニ たとえ鬼でも知り合いの鬼のほうがよい。何かにつけて知人は頼りになるの意である。話者たちは、

「トイー シンセキヨリ チカイ キンジョ」(遠い親戚より近い近所)と同じだと言う。

オータ トキ カサー ヌゲ 好機会に遭遇したら十二分にご馳走になれ。

オカエテヨル 少し知恵が足りない。「天保銭」などと同じだとの説明があつた。内日では、「ヒルマスボガ アガツテカラ アシヤー オカエタ デヨ。」(ふくらはぎが硬直して、足はばかになつてしまった)のように、体の状態を言う時にも用いる。

コンコトツク 蔭でこそこそと悪口を言う。コンコズクとも。

アキノ ユーヤケ カマー トゲ 秋の夕焼は晴天のしるしである。

ケーニモ ハレニモ 曇にも晴にも。後にも先にも。

(内) ケーニモ ハレニモ コレ イチマイギリジャケー。後にも先にもこれ一枚だけだから。

2 両地間に小差のあるもの

同じ発想で表現のやや異なるものをここに並べた。

(内) シリアケドリ 尻飽け鳥。飽きっぽい人間。

(安) アキヤスノホレヤス 新しいことにすぐ飛びつくがすぐに飽きる者。

(内) シリガセ マタイダ 事の途中でひるみ、あるいは意欲を失つてやめてしまった。「シリガセ」は鋤をくりくりつけた横木。これを牛に引かせる。牛が働ぐ気をなくすと後すざりしてこれをまたぐところから、この言いぐさが出ている。

(安) ケツワツタ 途中でやめた

(内) シリガセ ノセラレタ 人の口車に乗せられた。

(安) シリウマニノル 調子づいて他者に便乗して言動する。そのような若者を「ヤカマシー。イッセン ニセン タコテモ エーカラ マンナカニノレ。」(うるさい。一銭や二銭高くてもよいかから真中に乗れ。人の尻馬に乗るな。)とたしなめるという。

(内) イツボンズナジャー オエン 一筋縄ではないかない。暴れ牛は一本のタナオ(手緒)では追えず左右から手緒をとる(リョクチトル)ところから、手剛い人について言う。

(安) イツボンズシジャー オエン 右のものと同意であるが、岡では警戒にも賞賛にも言うという。牛に無縁のこの地では、この言いならわしの由来については知らないようである。

(内) ウラー カエス 今まで同調していた者がにわかに対抗の言動に出る。

(安) テノヒラー カエス 右に同じ。

(内) ワラー タク 中傷する。人の中傷で縁談がこわれた時などに「誰々がワラー タイタケー ヤブレタ」と言う。

(安) ソーバイー・ソーバタレ 中傷する者

3 両地にそれぞれ独自のもの

内日

ナエ ハンサク 苗半作。苗の太りぐあい今年作柄は半ばきま

ハチガツニジューヒチンチニ ウェルト クセガ ツカン 蕎麦は

八月二十七日に植えると病気になる虫もつかない。

ナガズナ ハワシ Chol のろのろと勝手気儘である。里帰りして何日も泊まる嫁や仕事ののろい人を批評することばである。長い手綱で牛をつかうと、牛が勝手気儘をするところからこの言いならわしが出ている。

オーコー オッタ 事が挫折した。「オーコ」は両端に鉤のついた

天秤棒である。この鉤で稲や薪の束を突きさして荷うのであるが、ときに荷が重すぎて折れ、仕事が続けられないことがあったという。

リユーオーサンニ クモガ カカッタラ アメ 南方の龍王山に雲がかかったら雨になる。

セキノ ポーポラガ ナルケー アシター アメ 南風で下関の港の船の汽笛が聞こえるから明日は雨になる。

イナカ(田舎)のことばとウラ(浦)のことば 一 下関市の内日と安岡のばあい

安岡

マンポー 体ばかり大きい役たたずを罵ることば。この名の魚はごろんと大きく動作がにぶい。

アギョー オッタ がつくりきた。生きている魚の頸を折って漁師は鮮度を保つのであるが、この瞬間、魚ががつくりするところからこのことばが生まれた。内日の人々は、魚の行商人が「コリヤアギオリジャケー ナー。」(これは生き魚だからねえ)と言うのは知っているが、この慣用句は知らない。

アキニシ オケゾコ 秋の西風は雨をもたらすので天水をためることができ。遠方に出漁する漁師には飲料水が貴重で、雨が降ればすぐに桶に取った。

デズキ ハチゴー イリナカラ 月の出には汐は八分め満ちており、月の入りには半ば干ている。

ツユノ アサヤケワ ナヌカノ セーテン 梅雨に朝焼けがすると七日間晴天が続く。

アメガ フルノワ ツキノイリカラ、ツキノデニワ アメガ アガル。雨が降りはじめるのは月の入る時刻であり、雨が降っていても月の出る時刻にはあがる。

ヒトツガミナリワ オーカゼニ ナル 秋から春にかけての時期、一つ雷の鳴る時にはきまって大風になる。

カミナリ ナツテ カデ フカズ 春一番以後、雷雨の烈しいことがあるが、案外、風は吹かない。

このように、ことに生活色の濃いものは生活の異なる地には伝播していない。一方、農業社会に生まれたと思える言いならわしの中

には、農耕の経験のまったくない安岡でも言うものもあるが、漁業社会から内日へ入ったと思える言いならわしはない。

三 両地間の差異の著しい語彙分野

「両地間の差異の著しいこと」の予想される語彙分野での状況はつぎのようであった。前号で述べた家号語彙ここでは取上げない。

1 天候・時刻語彙

風

コチ(内) (安) 東風。内日では雨をもたらず風である。

ヒカタゴチ(安) 東風。昼中はコチで、夜には風が穏やかになる。梅雨から夏にかけて吹くがしげになることが多い。「ウミガシンデシマウ。ヒガシノカゼウ。ウワツツラダケ。ソコニヒビカンカラ。」(海が死んでしまう。東の風は海の上っ面だけで底に響かないから。)と漁師は言う。漁には好ましくない風である。

キタ(内) (安) 北風。内日では晴天を約束する風である。

ネギタ(安) わずかに西にずれた北風。

ズルギタ(安) 雨をもたらず北風を「ジルイ北」と言ったもの。

「ズル」は「ジル」の音訛である。正月二月に吹くので、「シヨ」ニガツノ「ズルギタ」と言う。また「フリモノー ツケテクル」とか、「ヒヨリニ ナッタカト オモヤー(雨が) パーットクル」と言う。

アオギタ(安) 北風。「アオ」(青)は空の色で、「キタガヒドー ナッタラ スイヘーセンガ アオニナル」と言う。秋の

北風。

ヤマガタ(安) ウツイダオ 内日峠のほうから吹いてくる秋の北風。雨をもたらず。

ジョー 北東風。「ジョー」とも言う。「ジアオ」(地青)であろう。

キタゴチ(安) 北東風 しげになることが多い。

ハエゴチ(安) 南東風

ハエ(安) 南風

ハエニシ(内) (安) 南西風。夏の終りから秋にかけて吹く台風。

内日ではシノブキの屋根を吹きとばす風として知らわれた。

ニシ(安) 西風

アナジ(安) 北西風。秋から三月ごろまでの風。風も波も変らず、漁にはよい風である。「ハエニシガ キタニ ズッタラ アナジ」

で、北に動くことを「タコー ナッタ」(高くなった)と言う。ニハンノイワオコシ(安) 旧暦の二月半ばに吹く突風。「春一番」である。本来は旧暦二月十五日、涅槃会ころの風で「ネハンノ岩起こし」であるが、話者は「二半の…」と理解している。

メカブオトシ(安) ネハンノイワオコシの別名。波がワカメの茎を切るほどの烈しい風。

ハルノ ヒーテニシ(安) 桜の時期の、一日吹いただけで穏やかになる風。「ハルノ ヒトヨニシ」とも言う。

雨・雲・星

ツユノアシジロ(安) 梅雨あげごろに、まっ白い太い雨足を見せ、て激しく降る雨。

カゼソバエ(内) (安) 風とともに来る通り雨。北の風が多い。

安岡では、秋から四月ごろまでのこの風の時は無理な漁はするなと言う。

キツネノヨメイリ(内) (安) 天気雨

イワミタロー(安) 梅雨あけ時、北の空に出る入道雲。石見の方角に出るのでこの名がある。

ブンゴタロー(安) 梅雨あけ時、南方、豊後の方角に出る入道雲。「イワミタロー」「ブンゴタロー」は日和の安定を約束する。

このほか、雲の名として内日では「ニュードグモ」(入道雲)、「イワシゲモ」(鱗雲)の名があげられたが、知識としての名のようである。

ネボシ(安) 北極星

スマル(安) すばる星。十一月ごろは午後十時ごろ水平線に入る。

漁師は「スマルガ ハイルト ナマコガ デテ クル」(すばる星が水平線に入る時期になるとなまこが出てくる)と言いならわしている。

時刻

モーモードキ(安) 夕暮時。内日では「バンガタ」(晩方)とし

か言わない。安岡の話者たちは、幼時、夕暮時に「ハヨ モドラント モーモーガ デル ドー」(早く帰らないと化け物が出るぞ)と親たちに恐れさせられたことを記憶している。「モーモー

ドキ」は山口県周辺では対馬や島根県の石見地方で言ったことが、その方言集に見えている。山口県内の諸方言集には見えないが、福田百合子氏の「百合子のふるさと辞典」にあり、直接の教

イナカ(田舎)のことばとウラ(浦)のことば 一 下関市の内日と安岡のばあい

示もいただいた。氏は山口市に生まれ育たれた方である。安岡の「モーモードキ」は新来のものではなく、古い事象の遺存と見るべきであろうか。

2 動植物語彙

この項には会話中に自然に出たものの二、三を挙げる。意図的な調査はおこなっていない。

蛇 ヤムシ(内) クチナワ(安)

LAJに見ると「ヤムシ」は山口県下の豊浦郡・厚狭郡に分布し、それを囲んで九州・中国・四国・近畿に「クチナワ」類が広く分布している。

ひきがえる ヒキ・ドンビキ(内) ワクド(安)

LAJでは山口県下にはヒキ類が分布し、「ワクド」は九州に広く分布し、山口県下にはわずかに見えているにすぎない。

おたまじゃくし カエルゴ・オタマジャクシ(内) オタマジャクシ(安)

せきれい ソパウエドリ(内)

蕎麦を植えるところによく見かけると内日の人々は言う。安岡の人々は、鳥の名は、スズメ・ツバクロ・メジロ・カモメぐらいしか知らないと言う。

げんのしょうこ ミコシグサ(内) (安)

安岡の話者たちにも、学校からの帰途に探ってきてきて蔭干しにしていた記憶がある。薬草である。

動植物語彙の分野にも、長門域に特有な方言事象は内日により根強く、安岡には九州域分布事象を受入れやすい状況が見られる。

3 生業語彙

生業関係の語を、「物」、「家畜」、「作業」、「生業」に分類して記す。

(1) 「物」関係の語詞

イオとサカナ 安岡の漁家では、市場に出すまでは「イオ」で、店頭や行商の魚は「サカナ」だと言う。すなわち釣りに出るのは「イオ」ツリー「イク」であり、獲って来た魚を「イオ」モツテ「イナン カイ」（魚を持って帰らないか）と近隣の者に与える。ただし、魚屋は「サカナヤ」であり、魚の行商の女性は「サカナウリノ オバサン」である。

一方、内日では「サカナ」としか言わないが、話者の中、一人だけが、「子供のころウオツリと言ったようだ」と答えた。

アギオリ・ビタ（安） 生き魚。「アギオリ」の出自については先に述べた。

ジジ（内）（安） 魚の育児語

タダマイ（内）（安） うるち米

フチカタマイ（内） 自家用の飯米

スクモ（内）（安） もみがら。安岡の漁家は、対馬などに出漁する時、スクモやノコクズの中に氷を入れて行ったのでこの名を知っていると言う。現在はハップリースチロールを用いている。

リョーカ・ケブ（安）・ヨー デキタ（内）

内日では豊作を「ヨー デキタ」と喜び、安岡では大漁を「リョーカニ ナッタ」、「リョーカガアッタ」と喜ぶ。「漁荷」であるうか。わずかの漁獲の時には「ケブジャー」（ケブだ）と言う。

(2) 家畜関係の語詞

ウマ、オスウマ、ヒンバ（雌馬）、コウマ

昭和初期までは駄馬として馬を飼っていた内日の人々は、馬についてこれらの語を有しているが、安岡の人々は「ヒンバ」は知らない。その他も理解語にすぎない。

ウシ、コットイ（雄牛）、ウナミ（雌牛）、ベベ・マルクチ（子牛）安岡の漁家の人々も、「ウシ」「コットイウシ」「ベベウシ」という語は知っている。そして体の頑丈な人を「コットイウシ」とも言う。

タナオ、ハナグリ、モクチ、ウシコバナ・ソエバナ（内）

「タナオ」（手緒）は手綱、「ハナグリ」は鼻輪である。子牛のころは「ハナグリ」が通せないで「モクチ」（口輪）をはめ、これに手緒をつける。気性の荒い牛には「ハナグリ」のほかにもう一つ「ソエバナ」（添え鼻）を通し、これを「ウシコバナ」（牛小鼻）とも言った。これらの語は安岡の話者たちには無縁である。

(3) 作業関係の語詞

カタライ（内） 二家以上で一人の奉公人を雇い、その者が日を定めてそれらの家で働くこと。農繁期や造林の下刈りの時に角島やコットイ、特牛から雇入れていたが、昭和四十年ごろ以降、この風習はなくなったという。

ヤトイド（内） 雇い人。男性は「オトコシ」（男衆）、女性はオナゴシ（女子衆）と言う。農業が機械化されてからはこれらの人を入れなくなった。

フナカタ(安) 漁撈のために雇入れた人。漁業の盛んであった時代には北九州から多くの人が入っていて、安岡に定住した人もい

る。
イーデスル(内) 二軒以上が共同作業をする。今日も造林の下刈りなどをこの方法でする。

イーモドシ(内) 作業を手伝ってもらった家が、後日、同様に先方を手伝うこと。

コーロク(合力)(内) タダコーロク(安) とともに無賃労働奉仕を言う。弁当持参のばあい、内日では「クイデノコーロク」と言う。

テゴ(内)(安) 手伝い

シノキリ、シノダシ、シノブキ、シノタテバ(内) 屋根を「シノ」(すすきの大きくなったもの)でふいた内日にはこれらの語がある。「シノ」を生やしている「シノタテバ」から「シノ」を切り出すのは大変な労働であったという。当然のことながらこれらの語は安岡ではまったく聞けない。安岡の漁家は「ワラブキ」であったが、その職人は内日から入っている。

オーコ(内) 両端に鉤のついた天秤棒

ロクシヤク(内)(安) 天秤棒

ネコズキン(安) 布を筒状に縫った防寒頭巾。漁の時、頭から首までかぶる。

ズッキン(内) 毛糸で編んだもの、あるいは布で縫ったものがあったが、現在はタオルのホーカブリだという。

(4) 生業関係の語詞

イナカ(田舎)のことばとウラ(浦)のことば 一 下関市の内日と安岡のばあい

シヨ(バイ) 漁家では漁をすることを「シヨ(バイ)」と言う。すなわち、「キタニ ナツタラ ワリト(シヨ)バイガ デキル」(北風になったらわりあい漁がよくできる)、「ヨルノ シヨ(バイ) ナ(シヨ)ネムト(シヨ)イケン」(夜の漁だからねえ。眠くてたまらない。)のように言うのである。内日の人々の言う「シヨ(バイ)」は町の商人の業である。

アキナイ 内日では町に野菜や薪を売りに出ること、安岡では魚を売りに出ることと言う。この業を両地で「ウリモノニ イク」とも言う。安岡では、「獲りに行くのはシヨ(バイ)、売りに行くのはアキナイ」との説明もあった。安岡の魚の行商には、昭和十二、三年ごろまでは、ハンギリ(半切桶)に魚を入れて頭上運搬をしたカネリ(女の魚行商人)が活躍した。その後、天秤棒の担いからリヤカーでの運搬へ、現在はバスや列車での運搬と移っている。

トクイ(安) いつも買ってくれる家。カネリたちの間に「オトカ(トクイ)ラレテモ トクイワトラレンナ」(たとえ夫は奪われても得意は奪われるな)の言い草があった。

ジョ(ズケ)(安) 「常付け」であろう。魚代も月末払いといった安定した得意先。

トイノオバハン(内)

魚の行商に来る女性は、得意先が一定していたが、買う家々は行商の女性を「トイノオバハン」とも、また地名を冠して「ヨシミノオバハン」のようにも呼んだという。「トイ」について、重本多喜津編「長門方言集」(国書刊行会復刻)には、「浦の魚商

人の売り付けの部落区域を言う」とある。現在この語を記憶している人は少ない。

シガ(内)(安) 仲買人。ちなみに福岡県下では女性の魚行商人を言い、山口県下長門域にも魚の行商人を言う所もある。

四 両地における事象の保有と受容

内日と安岡のどちらが旧来の方言事象を根強く保有しているか、また、伝播してきた方言事象や共通語事象をどちらがより早く受容するかは、単純には言いがたい。が、私自身のこれまでの観察では、安岡漁業社会のほうが、旧来のものを根強く残す面と他地からのものをいち早く受容する面とをあわせ持っていて、その言語状況が多様である。

たとえば「こんな」に相当する方言事象は内日には「コネーナ」、安岡には「コネーナ」と「コガーナ」が併存している。広戸淳著『中国地方五県言語地図』³⁶⁵の図における両事象の分布状況は、「コネーナ」は「コガーナ」よりは古いことを見せている。この図の解説には、石見西部では「コネーナ」は「コガーナ」より上品だと土地人が言うと言われているが、内日の人々が「コネーナ」を選んでいるのも同じ心理である。内日の人々は「コガーナ」を、ウラツ(浦津)のことばだと言ひ、また別のことから関連してであるが、イナカポーニ ミラレンヨーニ ショート オモータ、ことばを選ぶという発言もあった。内日の生活語状況の背後には、内日の人々の言語評価意識、言語規範意識がある。「私にくれ」の意の「ヤレ」が安岡にあって内日にないの、その言語規範意識

によるのかもしれない。

また、布・綿などの焦げるに言い語は、内日では八名の話者が「ボロクサイ」で、一名だけが「ヤークサイ」をも答えた。安岡の話者のばあいは、「ヤークサイ」「ヤケクサー」「キリメクサイ」「キナクサー」と四名がそれぞれ異なっていた。藤原与一著『瀬戸内海言語図巻』²¹図、LAJ 34図を見る時、内日の状況はいかにも長門的であり、安岡の状況は北九州域の状況をもあわせ有していて複雑なのだと察せられる。「ひきがえる」の方言事象のばあいにも安岡に九州域分布事象の見えたことは先に述べた。

安岡の漁業集落に受け入れられ易いのは九州域分布事象ばかりではない。すでに述べているように、「カンバレ」(しもやけ)は、LAJ上では下関市域にはまだ届いていない瀬戸内海域分布事象であり、「アビタクム」(あぐらをかく)は日本海がわの分布事象であって、いずれも安岡にあって内日にはない。漁業の地のことばの多様性は、一つには海を渡ってくるものをいち早く受容し得る位置にあること、また一つにはその言語評価意識のおおらかなことによるのではあるまいか。

ところで、「仲間に入れる」の方言事象は内日では「イレル」「イッシュイシル」であり、安岡では「カタラス」である。「カタラス」は『中国地方五県言語地図』¹⁸⁹には見えない。「瀬戸内海言語図巻」²¹⁹図には、九州の周防灘域に「カツル」「カタラセル」などが、香川県佐柳島と岡山県頭島に「カタラス」があつて、内海域両辺に遺存する状況が見られる。安岡の「カタラス」が北九州域事象を受容したものか、この地の遺存のものかは単純には言いがたい。

先述のように、別意ながら「カタライ」は内日にもあった。先にあげた安岡の「モーモードキ」（夕暮時）や「ガカイガエー」（体格がよい）も、遺存か他域事象の受容かを言うことは容易でない。

おわりに

土地人はしばしば、ウラのことばとイナカのことばは違ふと言う。が、どの点がどのように異なるかについては明確な答えは得られないのがつねである。

どの分野にどのような差異が見られるか、それはどのような事情によるものかを明らかにしていきたい。

もともと、同一小方言域内の農業地区、漁業地区をとりあげても、今日、その農業形態、漁業形態はさまざまであり、都心部との生活距離もさまざまである。比較は慎重におこなわねばならない。今回はともに下関の市街地を都心としている内日と安岡の生活語の比較を試みた。

今回の調査、またこれまでの調査によって、私は、農村と漁村の生活語の差異は、その生活状況のちがいと、言語評価意識の差とによるものと考えている。今後、さらに調査を深めてその事情を明らかにしていきたい。梅光方言研究会で、一九八四年におこなった下関市七地、北九州市八地の調査では、七十代・五十代では農業の地と漁業の地との間に見られた差異が、三十代以降ではほとんど見られなくなっていた。この間の状況も明らかにしていきたい。

この節、私は、私の小報告がその土地土地の言語生活をありのままに写し出すものであることを、そして私の調査が、土地の方々か

イナカ（田舎）のことばとウラ（浦）のことば。―下関市の内日と安岡のばあい―

らいたくばかりでないことを強く願っている。今回の調査で内日の豊田政子さんが、「ホーゲン バカニ ナリマセン ナー。ワタシヤー スチョー スチョート オモートツタガ コリヤ ダイジゴトジャ。」（方言は軽視できませんねえ。私は捨てよう捨てようと思っていたが、これはまあ大事なことだ）。と言ってくださったこと、また安岡の隅清子さんが「ベンキョーニ ナラー ナー。」（このように方言のことを考え話しあうことは勉強になるわねえ。）と言ってくださったことは、まことにありがたいことであった。